

移行対象が青年期の主観的ウェルビーイングに与える影響

樋野 智 之

本研究では移行対象（以下、TO）と青年期の主観的ウェルビーイング（以下、SWB）、および境界例心性の関係を明らかにすることを目的とする。また、井原（2006）の示唆から、TO と CA の類似性も検討する。なお、TO と CA は遠藤（1989）の示唆を考慮に入れ、愛着の程度によって群分けする。質問紙の配布は、2013 年 9 月下旬～11 月上旬に行った。調査協力者は、4 年制大学の大学生および大学院生、244 名（男性 73 名、女性 171 名、平均年齢 19.71 歳（SD 1.59））を分析対象とした。なお、欠損項目があるか、平均年齢から大きく離れているものは除外した。また、TO と CA について大学院生（11 名）に対して予備調査も行った。

TO の有無における男女の比較の結果、女性の TO 発現率が、男性より高かった。CA では差は見られなかった。現在の TO の有無における男女の比較の結果、女性の現在の TO 保持率が男性より高かった。現在の CA では差は見られなかった。TO の種類における男女の比較の結果、女性は男性より 2 次性 TO の保持率が高かった。TO の有無の SWB 得点、BPD 得点を比較したところ、TO 有群の方が境界例心性および、つながり希求が高かった。現在の TO の有無の SWB 得点、BPD 得点を比較の結果、現在の TO 有群は境界例心性および、つながり希求、嫌悪に対する懸念、関係断絶が高かった。TO の有無を PBI 群に分け SWB 得点、BPD 得点を比較したところ PBI 中群において、TO 有群は境界例心性および、嫌悪に対する懸念が高かった。TO 有群において、PBI 高群、低群、中群の順に自信が高かった。PBI 中群・高群において、現在の TO 有群は関係断絶が高かった。現在の CA 有群で、PBI 高群・中群において現在の TO 有群は関係断絶が高かった。また、現在の TO 有群で、PBI 高群において現在の CA 有群は関係断絶が高かった。現在の TO 有群で、現在の CA 有群において PBI 高群・中群・低群の順に断絶が高かった。また、現在の TO 無群では、現在の CA 有群、無群において PBI 低群・中群・高群の順に断絶が高い傾向が見られた。

以上の結果から“CA を 3 次性 TO と位置づけることができる”、“日本においても TO は境界例心性の指標となる”、“愛着が中程度の場合でのみ、TO を保持していた者は境界例心性が高くなる”、“TO・CA の保持によって SWB は高くない”、“現在の TO・CA の両方を保持している者は、愛着が中程度か高いと関係断絶が高くなる”、“現在の TO・CA の両方を保持していない者は愛着が中程度だと関係断絶が高くなる”、“現在の CA のみを保持している者はもっとも健康的である”ことが示唆された。

今後の課題としては、より多くの調査協力者を募り、正確な分析をすること、調査協力者を広い範囲から募集すること、群分けに際し、妥当性が高まるように調整すること、TO の区分を明確にすることがあげられる。